

# アスター (エゾギク) China aster



学名: Callistephus chinensis (カリステフス キネンシス)  
科名: Compositae (キク科カリステフス属)  
原産地: 中国北部、朝鮮半島北部、西チベット、東トウルケスタン

花



ア  
ア  
ス  
タ  
ー

一般にアスターと呼ばれている花は、「蝦夷菊」という和名をもつ一年草のカリステフス・キネンシスで、同じキク科の多年草「宿根アスター」とは異なる種です。

カリステフス・キネンシス (エゾギク) は中国北部などを原産地としていることから、チャイナ・アスターという英名がつけられており、それが簡略化されてアスターと呼ばれるようになりました。日本には江戸時代の中期ごろに伝わり、主に切り花として重宝されてきました。ちなみにヨーロッパでは、1枚ずつ花びらを取っていく恋占いの花として親しまれています。

葉が卵形で鋸歯をもち、分枝した茎の先端に赤や紫・白・黄色などの花をつけるアスターは、一年草のなかで最も品種の多い草花といわれ、草丈80cm以上の高性タイプから30cm以下の矮性タイプ、花径15cm以上の巨大輪か

キクに似た端正な花姿をもつアスターは、古くからお盆やお彼岸の供花として利用されてきました。

<b>MEMO</b>	栽培：難易度 ★★☆☆☆	開花時期：6～9月
	生育温度：10～20℃	収穫時期：－
	手入れ：枯れた下葉、花がらを順次取り除く	高さ：15～80cm以上
	土：6：4 (赤玉土：腐葉土)	病気・害虫：萎黄病、萎凋病・ウリバエなど



アスター「ヒメローズ」。花の大きさの揃いがよく、切り花やアレンジに最適です。

ら3~4cm程度の小輪、さらに八重咲きやポンポン咲きなどさまざまな品種が存在し、その数は現在300種以上。それらは草姿から<sup>（ほみきだち）</sup>籐立形と<sup>（えだうち）</sup>枝打形に大別されます。

### 栽培ポイント

#### 👉 栽培

種まきは3月下旬~5月上旬ごろが適期。温暖な地方では10月ごろの秋まきも可能です。育苗箱などにまいた種子が、発芽した後、本葉が2~3枚出たら、いったん3号のビニールポットに移植。本葉が5~6枚になり、ビニールポットの底から根が見え始めたら、花壇もしくは5号鉢に定植します。

なお、アスターは連作を非常に嫌い、1回植えた場所では以後3~5年間は栽培できません。翌年も育てる場合は、場所や用土を変える必要があるので注意しましょう。

#### 🌡️ 生育温度

発芽適温は15℃前後、生育適温は10~20℃。高温多湿をやや苦手とし、冷涼な気候を好みます。

#### 👉 手入れ

枯れた下葉を取り除き、むれやすい株元の通風をはかります。また、花がらをそのままにしておくと、見栄えが悪くなるだけでなく

病害虫の発生にもつながるので、咲き終わった花は、順次取り除きましょう。

#### ☀️ 日照

日照不足になると枝や茎が徒長しやすくなります。年間を通じて日当たりのよい場所で育てましょう。

#### 💧 水やり

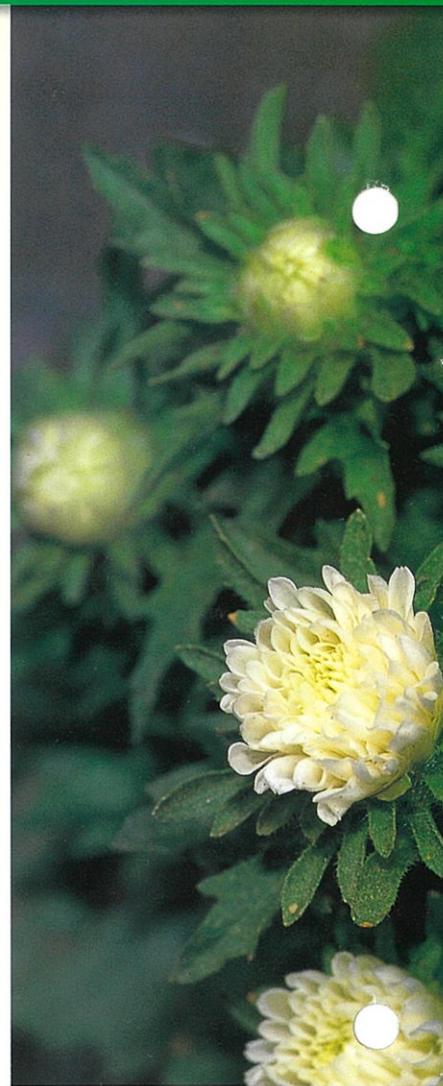
種まきから定植後に根づくまでは、表土が乾いたら水を与えますが、その後は乾燥状態を好むので、土の表面が乾いてから2~3日後に与えます。

#### ▲ 土

水はけがよく、腐植質に富んだ肥沃な土を好みます。用土は、赤玉土6、腐葉土4の割合で配合したものが最適。ただし、連作を嫌うので、過去数年でアスターの栽培に使用した土は絶対に用いてはいけません。

#### 🍷 肥料

育苗時は用土1ℓ当たり約4gの緩効性化成肥料を、定植時は1㎡当たり約3kgの乾燥牛ふんと、約200gの苦土石灰を、それぞれ施し



赤・白・ピンク・紫・黄と豊富な花色と多彩な花形をもっています。



「信じる恋」「変化」などの花言葉をもつアスター。ヨーロッパでは古くから恋占いに用いられてきました。



鮮やかな赤い花色と花もちのよさを誇る  
アスター 'プチ・スカーレット'



直径4cmほどの、淡いピンクの花色が可  
憐なアスター 'ヒメ・ペイル・ピンク'

## 「宿根アスター」の主な種

一般的にアスターといえばエゾギクのことをさしますが、植物学的にアスターといえば、キク科シオン（アスター）属の「宿根アスター」といわれる植物をさします。「宿根アスター」は、いくつかの近縁種を含む総称で、約250種が分布する北米を中心に、南米、アジア、ヨーロッパ、アフリカの世界各地に計400～500種が存在。日本にも20種ほど自生しています。そのほとんどが耐寒性に優れた多年草で、3～4年ほど植えたままでも問題はありませぬ。また、半日陰でも十分育ち、病害虫にも大変強い植物なので、栽培は簡単。殖やす場合は、3～4年に1回、株分けするとよいでしょう。

### ●アスター・アメルス

原産地はヨーロッパおよび西アジア。草丈約45～75cmで、秋にヒナギクのような青紫色や赤色をした花を咲かせます。

### ●アスター・アルピヌス

北半球の高山に自生。品種が多く、花色も白・桃・紫・青とさまざま。低い草丈で群生し、大きく広がるのが特徴です。

### ●ネバリノギク（アスター・ノウェアングリアエ）

北アメリカ東北部を原産地とし、草丈250cm程度の高性タイプから60cm程度の矮性タイプまで存在。葉に粘り気をもつこと

から、この和名がつけました。花色は紫・赤・白・桃など多彩ですが、茎を切るると閉花する性質があるため、切り花には適していません。

### ●ノヤマコンギク（アスター・アゲラトイデス）

日本を含む東アジアからインドにかけて広く分布。草丈約60cmで、花色は青・白・赤・紫など変化に富んでいます。

**コマチギク**——白花の矮性種で、花期は秋。草丈が約20cmと低いことから、切り花には適していません。

**コンギク**——秋に直径約3cmの濃紫色の花を咲かせます。草丈は約60cm。品種も多く、斑入りのものも見られます。

**センボンギク**——秋に淡青色の花を咲かせます。茎の先端がたくさん枝分かれすることから「千本菊」の名がつけました。

**チョクザキヨメナ**——ヨメナに似た鋭鋸歯のある葉をもち、切り花用として生産農家を中心に栽培されている種。秋に淡紫色の細い筒状の花を咲かせます。

### ●ユウゼンギク（アスター・ノウィーベルギー）

北アメリカ原産の多年草。品種が多く、花色も白・紫・赤などさまざま。草丈20～180cmで、外見はアスター・ノウェアングリアエに似ていますが、こちらは切り花にも利用でき、耐寒性にとくに優れている種です。

## 穂立形と枝打形の主な品種

アスターは草姿から穂立形、枝打形の2つに大別されます。

### ●穂立形

茎の上部から枝を多く出し、その先々に花を咲かせるタイプ。穂を逆さまにしたような草姿から、この名称がつけられました。日本で作出された改良品種のほとんどがこのタイプに属します。

#### ‘アリアケ’

穂立形の代表的品種。草丈50～60cmで、花は直径4～6cmほどの中輪咲き。茎の上部で枝が分岐するのが特徴です。

#### ‘クレナイ’

病気や害虫に強く、栽培が容易であることから、広く栽培されている品種。草丈は約30～80cmで、鮮やかな紅色の花を咲かせます。‘紫クレナイ’や‘桃クレナイ’などの同系統品種が存在します。

#### ‘マーガレット・ホワイト’

高性で草丈は約70～80cm。一重咲きで、花径5～6cmの白色の花を咲かせます。

### ‘レッド・ホワイト・センター’

草丈は50～60cm。中輪咲きで、外側が濃赤色、中心部が純白色の花をつけます。強健な性質で、栽培は簡単です。

### ●枝打形

株元から何本にも枝分かれし、その先々に花をつけるタイプ。アメリカやヨーロッパで品種改良されたものは、ほとんどがこの枝打形に属します。

#### ‘カーペット’

矮性タイプの代表品種で草丈は約20cm。花期は夏で、株全体が丸みを帯びた毬状になるのが特徴です。

#### ‘ピノキオ’

草丈は15cm程度と、‘カーペット’よりもさらに矮性の品種です。

#### ‘ユニカム’

高性タイプの代表品種で草丈は50cm以上。花期は夏で、針管状の花弁が集まった大きな花を咲かせます。その豪華な花姿と高い草丈から、主に切り花としての需要が高いようです。

### 購入アドバイス

4～5月ごろに出まわる苗を購入するときは、葉に斑点がなく、葉色が濃いものを選ぶとよいでしょう。また、種子から育てる場合は、1年以内に採取したものであるかどうかを確認することが大切です。



立ち枯れ病などの耐病性に優れるアスター ‘ミス・ヨーロッパ・レシースト’

ます。定植後は、つぼみが増え始める時期まで、速効性の化成肥料を月1～2回の頻度で与えるとよいでしょう。

### 植えかえ

植えかえはとくに必要ありません。

作業	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
日照					日向								
水やり				多め		少なめ							
肥料													
植えかえ							不要						

## 殖やし方

実生で殖やしますが、アスターの種子は短命なので、採取後1年以内で使用します。また、種まき時には、必ずベンレートT100倍液などで種子を殺菌消毒しましょう。

分岐した枝の先端に1つずつ花をつけるアスター。「宿根アスター」に比べ、花のすぐ下につく緑色の総苞が大きくするのが特徴です。



## 病気対策と害虫防止

- 葉が黄色く変色したあと、株全体が萎縮して育たなくなり、最後には枯れてしまう萎黄病。センチュウやヨコバイなどの害虫の媒介によるウイルス性の病気で、発病した株はすぐに焼却処分し、ほかの植物への伝染を防ぎます。予防策としてはボルテージなどの薬剤を土中に混ぜておくとういでしょう。
- 株元が黒褐色になり、葉茎がしおれて枯れてしまうのが立ち枯れ病。連作を避け、種子を消毒することで予防します。発病した際は株をすぐに引き抜き、ほかの株への伝染を防ぎましょう。
- 萎凋病は、根や茎の導管が冒され、株全体が枯れてしまう病気です。立ち枯れ病と同じく、連作を避けることと種子消毒することが大切で、発病株はただちに引き抜きます。
- 梅雨時には、葉が枯れてしまう灰色カビ病に要注意。被害を受けた葉を取り除いたうえで、ロブラル水和剤やトップジン水和剤を散布します。
- ウリハムシが発生し、葉やつぼみなどを食い荒らすことがあります。こまめにチェックし、発見したらカルホス乳剤などを散布して駆除しましょう。
- 葉に曲がりくねった白い食害痕をつけるのがハモグリバエの幼虫。多発すると、葉が真っ白になってしまいます。発生初期に、マラソン乳剤やDDVP乳剤などを散布すると効果的です。